世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Recognition of Non-intentional Events of Japanese and Chinese Native Speakers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黄, 健敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1200

〔調査報告〕

非意図的な出来事に対する日中母語話者の事態認識について

Recognition of Non-intentional Events of Japanese and Chinese Native Speakers

黄　　健　敏

キーワード：事態認識・責任意識・回避可能性・非意図的出来事・語用論

1. はじめに

日本語学習者にとって「落ちる・落とす」のような対のある自他動詞の習得は難しく、上級レベルになっても母語話者と異なる言語使用が多く見られる。特に非意図的な出来事を表現する場合のように、対のある自他動詞のどちらを使っても文法的に誤りがない場合の使い分け、つまり語用論的な使い分けには困難がある（守屋 1994, 伊藤 2015）。

例えば、「皿の破損」という事態が起こったことを言語化する場合、自動詞を使って「お皿が割れました」と表しても、他動詞を使って「お皿を割りました」と表しても、どちらも文法的には正しい。しかし、その事態がどのようにして引き起こされたかによって、すなわち、意図的であるか、非意図的であるかによって自他動詞のどちらを使うのが適切なのかは変わってくる。また、非意図的であっても他動詞を使用する方が適切である場合もある。

例えば、非意図的な皿の破損という事態を他人に伝える場合、どのような表現を用いるのが適切なのだろうか。飲食店でアルバイトをしている筆者の中国人の友人の話であるが、テーブルの前を通った途端、テーブルに置いてあった皿が落下して破損したことがあったそうである。自分が落としたわけではないので自動詞を使うのが適切だろうと思い、店長に「お皿が割れました。」と報告したところ驚かれたという。このように、文法的には正しくても、語用論的には不適切な自動詞の使い方をした場合、聞き手に無責任だと思われる恐れがある。

西光（2010）によれば、目の前で起こった事態をどのように認識するかは、個人、あるいは文化によって異なり、また、それをどのように表現するかは言語によって異なるという。したがって、日本とは異なる文化環境で育った日本語学習者が同じ事態を目にした場合、母語や母文化の影響によりその事態認識、および、それを言語化する際に使用する日本語の自他動詞表現は日本語母語話者とは異なる可能性がある。

自他動詞の語用論的な使用が問題となる非意図的出来事に関して、その事態認識や言語化は日本語母語話者と日本語学習者ではどのように違うのだろうか。特に自動詞・他動詞の使い分けの

ない中国語を母語とする日本語学習者の場合はどうなのだろうか。筆者はこの問題を解明することを目指している。

日本語学習者の事態認識は、日本語学習を通して、日本語や日本文化から影響を受ける可能性もあると思われる。そこで、本研究では、日本語母語話者、中国語母語話者、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、非意図的な出来事をどのように認識するかについて調べることを目的とする。

非意図的出来事の事態認識とその出来事を表現するための自他動詞の使い分けがどのように関係しているかは、そのような使い分けのない中国語母語話者を対象として調べることはできない。そのため、本稿では日本語母語話者、中国語母語話者、中国語を母語とする日本語学習者の非意図的出来事の事態認識の比較だけに焦点を当て、日本語母語話者と日本語学習者の非意図的出来事の言語化の比較については稿を改めて論じることにしたい。

2. 先行研究

2.1 対のある自他動詞について

日本語には対のある自他動詞が存在する。いろいろな研究者が対をなす自他動詞をそれぞれ定義している（奥津 1967, 西尾 1982, 寺村 1982 など）が、このうち、寺村（1982）では形態的な対立があり、ある共通の語根から自動詞、他動詞が派生したと見られるものを「相対自他動詞」と定義している（寺村 1982）。さらに中石（2005）では、この寺村の相対自他動詞に加え、語根は共有していないが、日本語の初級教科書では自他動詞対として指導される「入る・入れる」を含めて「対のある自他動詞」としている。本稿では中石（2005）の定義に従って、「対のある自他動詞」という用語を使用する。

伊藤（2015）は、日本語の対のある自他動詞を「状況把握の対のある自他動詞」と「状況報告の対のある自他動詞」に分類している。これは廣瀬（2011）による言語使用を「状況把握」、「状況報告」、「対人関係」の三層に分ける「言語使用の三層モデル」という文法と語用論の関係を扱う理論を援用した分類である。そして、伊藤（2015）は、対のある自他動詞には従来の形態的・意味的な分類だけではなく、使い方による分類が存在すると主張している。話し手の思いを言語化しただけで、聞き手への伝達意図が想定されない私的な「状況把握」表現と、聞き手に対する話し手の伝達意図が想定される公的な「状況報告」表現の 2 種類である。

日本語教育においては、対のある自動詞は「変化の結果」、対のある他動詞は「動作の遂行」と教えられることが多い。しかし、この考え方に基づけば、「変化の結果」や「動作の遂行」という動詞の意味的な側面からの使い分けだけでなく、事態をどのように把握し、どのように他の誰かに報告するかという語用論的な側面から対のある自他動詞を使い分けることが重要であると言える。

筆者は伊藤（2015）の分類における 2 種類の対のある自他動詞のうち、コミュニケーションを重視した「状況報告の対のある自他動詞」がどのように使用されるのかという問題の解明に取り組んでいる。中国語には対のある自他動詞という概念は存在しない。中国語における「及物动词」・「不及物动词」は自他動詞の概念に似ているが、1 つの動詞が「及物动词」としても「不及物动词」としても使えるため、異なる動詞を用いて区別する必要がない（望月 1991）。このような母語を

持つ日本語学習者を対象として、ある事態をどのように捉えるか、また、その事態の言語化に自他動詞のどちらを使用するか、つまり、事態認識と自他動詞の語用論的使い分けの関係を明らかにすることを目指している。本稿ではその第一歩として、日本語母語話者、中国語母語話者、中国語を母語とする日本語学習者を対象として非意図的な出来事に対する事態認識の傾向を調査した結果を報告する。

2.2 非意図的な出来事に対する自他動詞の使用

水谷（1979）では、留学生が借りている間に故障してしまったストーブを持ち主に返却する際、この前から借りていたストーブが「壊れてしまいました」と告げた途端、相手が不機嫌になってしまい、口をきいてくれなくなったという話を例にして、自他動詞の使用について次のように述べている。

> 「壊れました」と「壊しました」は、文法的に言えば、他動詞的表現と自動詞的表現の差に過ぎない。（中略）「壊しました」という表現は、文字通りに考えれば、確かに、壊れたことに対して自分が何らかの責任を持っている場合、あるいは、意図的にその行為を行った場合に限られるであろう。一方、「壊れました」は、物自体が壊れた状態を客観的に示すわけである。従って、物が実際に壊れ、しかも壊れたことに対して当事者が特に責任を感じないならば、「壊れました」と表現しても何ら差障りはないわけである。
>
> （水谷 1972：145）

そして、日本語母語話者であれば多くの人が、たとえ故障の原因が不明で自分の責任の有無も不明であったとしても、「壊しました」という自己に責任のある表現形式を選択するであろうと述べている。つまり、相手に属する物を借り受けたという関係の中で、壊れたことに対する責任の念を表明するための言語表現として他動詞が用いられることが多いということである。日本語に非意図的な出来事を他動詞で表現する傾向があることは、水谷（1979）以外にも、Hinds（1986）、吉成・プラシャント・鄭（2010）、西光（2010）などで指摘されている。

2.3 非意図的出来事における責任意識

非意図的な出来事を他動詞で表現する場合、その語用論的な要因の一つとして、水谷（1979）や Hinds（1986）では「話し手の出来事に対する責任意識」が挙げられている。

Hinds（1986）は、アメリカ人である英語母語話者と日本語母語話者を対象者に、「あなたは月曜日に教授の所へレコーダーを返しに行った。そのレコーダーは先週末に使うために先週、教授から借りていた。しかし、当日使おうとすると使えなかった。原因はよくわからないが、あなたが壊したわけではない。」という状況でどのように発話するかを調査した。その結果、英語話者は自動詞表現で「I don't know how it happened, but the tape recorder broke.」、日本語話者は他動詞表現で「すいませんが、これを壊してしまいました。」と表現した。

Hinds（1986）は、非意図的な出来事の中でも、特に借りた物に被害が及んだことを持ち主に告げる場合、日本語では他動詞文が、英語では自動詞文が用いられる傾向があり、事態に対する

責任を明示的に表明するために、日本語では他動詞表現が用いられると説明している。また、それは責任意識を言語形式の中に含めて表明すること、つまり他動詞表現を用いることが文化的に求められているためだと分析している。しかし、英語話者が責任意識を持っていないというわけではなく、どちらの言語話者も非意図的な行為に対する責任意識を持っていた。したがって、それを言語形式の中に含めて表すかどうかは、言語・文化によって異なるのだろうと述べている。

吉成・パルデシ・鄭（2010）は日本語・韓国語・マラーティー語母語話者を対象に、非意図的な出来事の言語化と責任意識の関係を調べた。その結果、日本語話者と韓国語話者には事態に対する責任意識が高い場合に他動詞表現が用いられる傾向が見られたが、マラーティー語話者には見られなかった。このように非意図的出来事における責任意識と他動詞使用の関係は言語によって異なることが明らかになったが、西光（2010）によれば、事態に対する責任意識の感じ方自体が言語、文化によって異なるという。

2.4 非意図的出来事における回避可能性意識

Berk-Seligson（1983）でも、コスタリカのスペイン語において他動詞使用と責任意識が関わっていることが示されているが、この研究ではさらに、その責任意識は注意できたのにそれを怠ったという認識によるものであると示唆されている。このことは Weiner（1995）による責任判定プロセスのモデルと一致するものである。

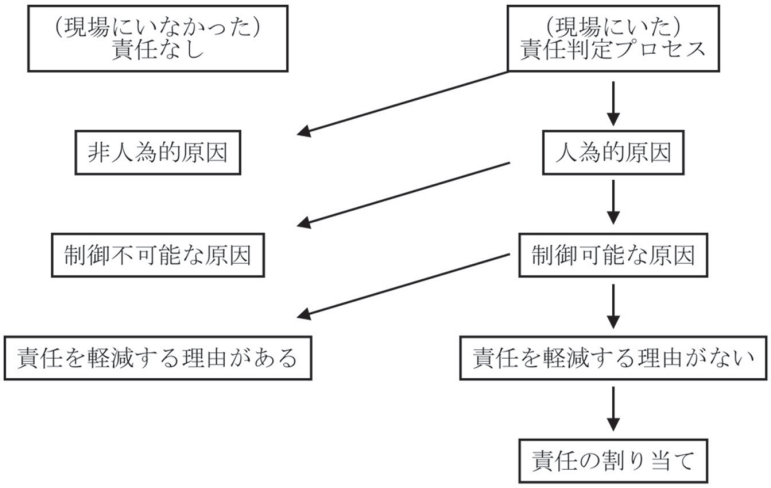

図 1　責任判定プロセス（Weiner 1995）（筆者訳）

このモデルによると、一般的には、事態に対する責任の有無を判断するには、まず事態が起こった時、動作主が現場にいたかどうかが問題となる。当然のことながら、いなかった場合は責任を問うことができない。現場にいた場合は、原因が個人に関連するかどうかが問題になる。個人に関連する原因である場合は、制御可能な原因と制御不可能な原因に分けられる。そして、制御可能な原因の場合、責任を軽減する理由があるかどうかによって責任の大きさが決まる。責任を軽

減する理由がなければ、責任を負うべきであると判断される。このように、責任の度合いは事態の制御可能性と大きく関わっていると言える。

西光（2010）もこのモデルについて言及している。その中で、事態を起こした原因が制御可能な場合でもやむをえない事情があれば責任を逃れることができるが、責任を免れる事情をどこまで含めるかについては文化間で異なる可能性があると述べている。また、非意図的な行為については制御可能性の判断は難しく、責任があるかどうかも客観的に判断するのが難しいとも述べている。

制御可能性は回避可能性と言い換えることができるが、吉成他（2010）でも日本語、韓国語、マラーティー語の母語話者を対象として調査した結果、責任意識と回避可能性の意識との間に密接な関係があることが示されている。

3. 研究課題

以上のように、非意図的な出来事に対する事態認識は責任意識や回避可能性が深く関与しており、それが言語使用にも反映される可能性があること、また、それらの関係は言語、文化によって異なることが示唆される。

そこで、本研究では非意図的な出来事における事態認識と言語使用の関係を解明する前段階として、中国語を母語とする日本語学習者（以下：CJ）、日本語を学習したことのない中国語母語話者（以下：CNS）と日本語母語話者（以下：JNS）における非意図的な出来事に対する事態認識について調査したい。研究課題は以下の通りである。

研究課題：中国語を母語とする日本語学習者、中国語母語話者、日本語母語話者はどのように非意図的な出来事を認識するか。

（1）責任意識に違いはあるか。

（2）回避可能性意識に違いはあるか。

4. 研究方法

4.1 調査対象者

CJ グループは外国語環境で日本語を学習する中国語を母語とする大学生である。中国広東省の大学の日本語学科に在籍している学生 204 名である。比較対象とする JNS グループの日本語母語話者は、関東地方の大学に在籍する学生 26 名である。また、CNS グループの中国語母語話者は、日本語学習の経験がない中国生まれ中国育ちの中国人大学生 77 名である。

4.2 調査項目

本研究では質問紙調査を用いて CJ、JNS、CNS の非意図的な出来事に対する事態認識の傾向を調べる。調査のために設定した状況は吉成他（2010）を参照した。

場面は「あなたは友達の家で夕食をごちそうになった。後片付けを手伝おうとしたとき、ある原因で足がテーブルに当たり、テーブルから皿が落下し、破損した。その皿はとても高価なもののようだった。台所にいた友達が戻ってきた。」である。そして、テーブルから皿が落下し、破損したという事態を引き起こした原因として、次の 4 条件を提示した。

状況 1：あなたは酔っぱらっていた。
状況 2：あなたはうっかりしていた。
状況 3：あなたは急にめまいがした。
状況 4：急に強い地震が起こった。

示された各状況における責任意識と回避可能性意識を尋ねる質問を設定した。その事態に対してどのくらい責任を感じているか（1：全く責任がない～ 7：非常に責任がある）、その事態を避けることができたと思うか（1：絶対に避けられなかった～ 7：絶対に避けられた）を 7 段階で評定してもらった。JNS 向けのアンケートは日本語で、CNS 向けのアンケートは中国語で作成した。CJ 向けのアンケートは日本語と中国を併記した。

5. 結果

5.1 責任意識

4 つの状況に対する 3 グループの責任意識の平均値と標準偏差を表 1 に示す。図 2 は平均値をグラフに示したものである。

表 1　各グループの責任意識の平均値と標準偏差

状況	CJ n=204		JNS n=26		CNS n=77	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
酔い	5.82	1.46	6.69	1.23	5.86	1.7
うっかり	5.86	1.47	6.08	1.65	6.22	1.45
めまい	5.46	1.38	5.35	1.77	5.05	1.81
地震	3.28	1.83	3.04	1.69	2.97	1.83

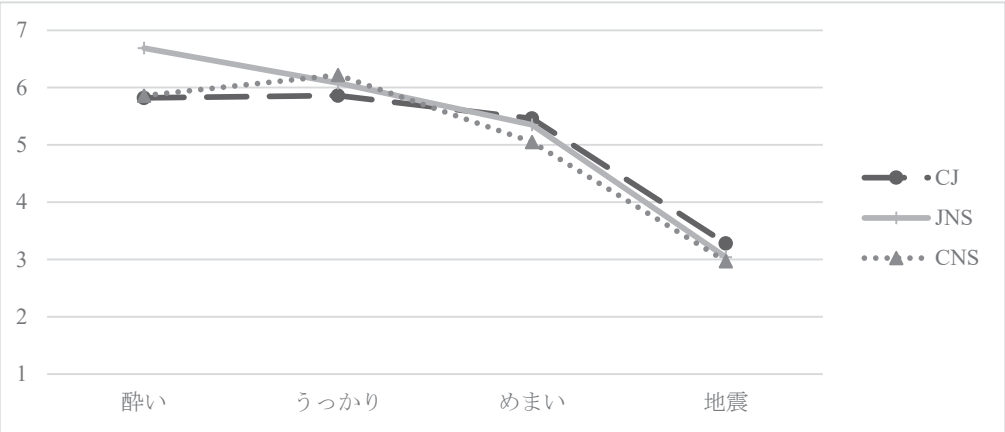

図 2　各グループの責任意識の平均値

どのグループも「地震」における責任意識の平均値が最も低く、「酔い」「うっかり」の平均値は相対的に高い傾向が見られる。状況によって責任意識の強さが異なるかどうかを検討するため、グループ（CJ、JNS、CNS の 3 グループ）を被験者間要因、状況（4 条件）を被験者内要因にして 2 要因分散分析を行った。分散分析の結果、交互作用が有意であった（F (6, 912) = 3.752, p < .01）。グループの主効果は有意ではなく、状況の主効果（F (6, 912) = 204.837, p < .001）は有意であった。状況の単純主効果を検定したところ、すべてのグループにおいて有意であった（CJ：F (3,1216 = 121.721, p < .001，JNS：F (3, 1216) = 26.215, p < .001，CNS：F (3, 1216) = 64.168, p < .001）。多重比較を行なった結果、次の状況の間に有意差が見られた。「＞」は二者間に有意差があること、「・」は二者間に有意差がないことを示す。

CJ：　うっかり・酔い ＞ めまい ＞ 地震

JNS：酔い・うっかり ＞ めまい ＞ 地震

CNS：うっかり・酔い ＞ めまい ＞ 地震

以上の結果をまとめると、記述統計レベルではグループによって状況の平均値に若干違いはあったが、どのグループにも次のような傾向が見られた。

うっかり・酔い ＞ めまい ＞ 地震

この結果から、責任意識に関しては CJ、JNS、CNS に差がないこと、4 つの状況の中ではどのグループも「うっかり」「酔い」が原因の事態に対しては責任意識が強く、「地震」が原因の事態に対しては責任意識が弱いこと、そして「めまい」がその中間にあることが示された。

5.2 回避可能性意識

4 つの状況に対する 3 グループの回避可能性意識の平均値と標準偏差を表 2 に示す。図 3 は平均値をグラフに示したものである。

表 2　各グループの回避可能性意識の平均値と標準偏差

状況	CJ n=204		JNS n=26		CNS n=77	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
酔い	4.90	1.79	5.69	1.49	4.78	1.92
うっかり	5.13	1.73	5.77	1.8	5.32	2.09
めまい	4.12	1.67	3.65	1.81	3.04	1.80
地震	3.26	1.87	2.85	1.59	2.62	1.82

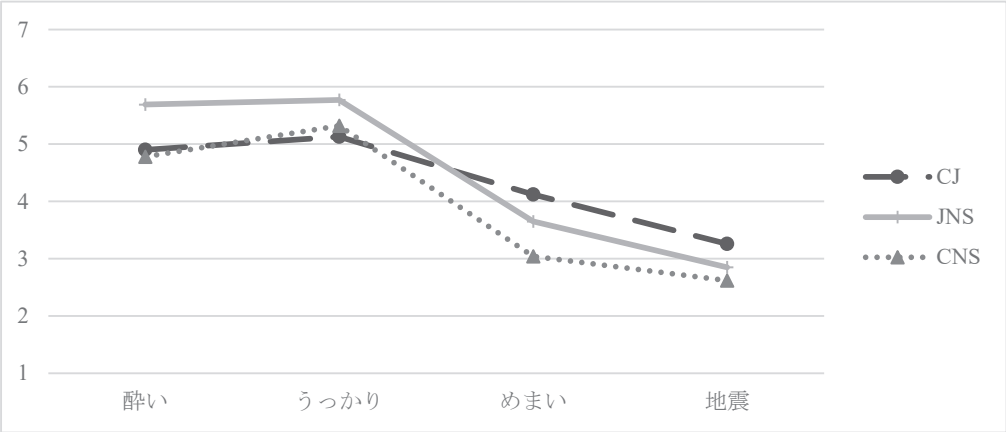

図 3　各グループの回避可能性意識の平均値

図 3 を見ると、責任意識と比較してグループによって平均値に違いがあること、また、全般的に CNS の平均値が CJ、JNS より低いことが分かる。しかし、条件間の違いは責任意識と同様の傾向が見て取れる。回避可能性意識に関しても、グループ（CJ、JNS、CNS の 3 グループ）を被験者間要因、状況（4 条件）を被験者内要因にして 2 要因分散分析を行なった。その結果、交互作用が有意であった（F (6, 912) = 5.433, p < .001）。グループも状況も主効果が有意であった（グループ：F (2, 304) = 3.539, p < .05, 条件：F (6, 912) = 102.576, p < .001）。

そこでまず、グループの単純主効果を検定した。その結果、「めまい」と「地震」の 2 つの状況において有意であった（めまい：F (2, 1216) = 10.176, p < .001，地震：F (2, 1216) = 3.717, p < .05）。多重比較の結果、「めまい」と「地震」において次のようなグループ間の有意差が見られた。

めまい：CJ ＞ CNS

地震：CJ ＞ CNS

このように「めまい」と「地震」の 2 つの状況における回避可能性意識は、CJ の平均値が CNS より有意に高いことが示されたが、CJ と JNS、及び CNS と JNS の間には有意差は見られなかった。

次に、状況の単純主効果を検定した。その結果、責任意識の場合と同様に、すべてのグループにおいて有意であった（CJ：F (3, 1216) = 45.472, p < .001，JNS：F (3, 1216) = 17.402, p < .001，CNS:F (3, 1216) = 41.072, p < .001）。多重比較の結果、次の状況の間に有意差が見られた。

CJ：うっかり・酔い＞めまい＞地震

JNS：うっかり・酔い＞めまい・地震

CNS：うっかり・酔い＞めまい・地震

以上のように､「めまい」と「地震」との間の差については統計上に有意差があるグループも、なかったグループもある。しかし、どのグループにおいても「うっかり」「酔い」が原因となった事態は回避できる可能性が高く、「地震」が原因となった事態は回避できる可能性が低いと考えていることが示された。

5.3 責任意識と回避可能性意識の関係

前述した責任意識の傾向と合わせてみると以下の通りである。

CJ（責任意識）：　うっかり・酔い＞めまい＞地震
CJ（回避可能性意識）：　うっかり・酔い＞めまい＞地震
JNS（責任意識）：　酔い・うっかり＞めまい＞地震
JNS（回避可能性意識）：うっかり・酔い＞めまい・地震
CNS（責任意識）：　うっかり・酔い＞めまい＞地震
CNS（回避可能性意識）：うっかり・酔い＞めまい・地震

統計上に有意差があるかどうかという視点からみると回避可能性意識と責任意識の関係は多少ずれている。しかし、記述統計ではどのグループにも「うっかり・酔い→めまい→地震」の順に責任意識、回避可能性意識が弱くなる傾向がみられた。

責任意識と回避可能性意識の間にどの程度関連があるのかを検証するためにグループごとに相関分析を行った。その結果、どのグループにも次のような有意な相関関係が示された。

CJ：$r = .514^{**}, p < .01$
JNS：$r = .791^{**}, p < .01$
CNS：$r = .532^{**}, p < .01$

JNS においては高い正の相関、CJ、CNS においては中程度の正の相関が認められた。つまり、どのグループも共通して、回避可能性が高い状況では責任意識も高いことが示され、回避可能性意識と責任意識は強く関わっていると言える。

6. 考察

研究課題は「中国語を母語とする日本語学習者、中国語母語話者と日本語母語話者のそれぞれはどのように非意図的な出来事を認識するか」である。まずはその下位課題（1）「責任意識に違いはあるか」について考察していく。責任意識では CJ、JNS、CNS に差が見られず、4 つの状況においてどのグループも出来事に対する認識に違いが見られなかった。この結果から、日本語母語話者、中国語母語話者、中国語を母語とする日本語学習者の三者は、本研究で設定した状況の非意図的な出来事に対してほぼ同程度に責任を感じていると言える。

どのグループにおいても「うっかり」「酔い」が原因の事態に対しては責任意識が強く、「地震」が原因の事態に対しては責任意識が弱い。しかし、その中の「酔い」では中国語母語話者（CJ と CNS）は日本語母語話者より責任を若干低く判定していた（図 2 参照）。これは日中の酒文化の違いに起因するかもしれない。「乾杯」という言葉は、日本、中国ともに使われる。しかし、中国

人が言うところの「乾杯」は、必ず杯に注がれた酒を一息に飲み干さなければならない。これは、日本文化における「乾杯」とは基本的に異なる。日本では、「乾杯」とは言うが、必ずしも杯の酒を飲み干す意味ではない。慶事や健康を祝して、あるいは飲食の開始の合図として乾杯することが多いようである。また、中国には相手に酒を勧めるという習慣がある。宴会の席では、友達の間や主客の間において、お互いに「もう一杯どうぞ」と酒を勧め合う。このようにすることで、相手に対する自分の思いやりや友情の気持ちなどを表現したり伝えたりする。そして、双方が飲める限界の量やそれを超えたとき、相互に友情を認め合うというのが中国の文化である。しかし、日本では無理に勧めることなく、人々それぞれ自分の「酒の量にあわせて」酒を飲むことが多い。こういう文化の違いから、中国語母語話者は酔ったことに対する責任をそれほど感じないのに対し、日本語母語話者は酔わないようにすることが責任だと思っているのかもしれない。

次に下位課題（2）「回避可能性意識に違いはあるか」について考察する。回避可能性意識は 2 つの状況（めまい・地震）において CJ と CNS の間に有意差があった。つまり、同じ中国語母語話者であっても CJ と CNS では「めまい」「地震」に対する認識が異なっており、CJ の方が回避可能性意識が高かった。一方、CJ と JNS の間に有意差はなかった。しかし、記述統計レベルではどの状況においても CJ と JNS の回避可能性意識は CNS より高い。この結果から、日本語を学習することによって、中国語母語話者の非意図的な出来事に対する事態認識が多少変化した可能性もうかがえるが、これは推測に過ぎないため、さらなる検討が必要であろう。

また、各グループにおける条件間の比較では、責任意識と同様に回避可能性意識も「うっかり・酔い→めまい→地震」の順に低くなっていた。そして、すべてのグループにおいて責任意識と回避可能性意識に相関関係が示された。Weiner（1995）の責任判定プロセスのモデル（図 1 参照）では、制御可能な原因によって事態が発生した場合に責任が生じることが示されている。本研究の結果は、この Weiner のモデルを支持するものと言える。

しかし、責任意識と回避可能性意識の相関は CJ、CNS と比べ、JNS において非常に強かった。つまり、母語によって責任意識と回避可能性との結びつきの強さが異なっており、日本語母語話者は回避可能性が高い状況で意図せぬ事態を招いたことに対して、強く責任を感じる傾向があると言えるだろう。Weiner の責任判定プロセスのモデルでは、原因が制御可能かどうかという判断と責任の割り当ての間に、責任を軽減する理由の有無を検討するプロセスが含まれている。本研究の結果から、Weiner のモデルの制御可能性の判断から責任の割り当ての間のプロセスに、母文化の違いが反映されている可能性があるのではないだろうか。

7. まとめと今後の課題

本研究は、非意図的な出来事のうち相手の持ち物に損害が生じた場合の事態認識（責任意識、回避可能性意識）とその言語化の関連について、日本語学習者と日本語母語話者の間の異同を明らかにするための前段階で行った調査である。具体的には、日本語母語話者、中国語母語話者、中国語を母語とする日本語学習者の三者を対象として、4 つの状況における非意図的な出来事に対する事態認識について質問紙調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、責任意識では日本語母語話者、中国語母語話者、中国語を母語とする日本語学習者の三者ともに非意図的な出来事に対してほぼ同程度に責任を感じていた。「うっかり」「酔い」が原因

の事態に対しては責任意識が強く、「地震」が原因の事態に対しては責任意識が弱い。

次に、回避可能性意識については、ほとんどの状況において中国語母語話者の認識の平均値が最も低かった。また、どのグループも「うっかり」「酔い」が原因の事態は回避できる可能性が高いが、「地震」が原因の事態は回避できる可能性が低いと考えていることが示された。これは責任意識と同様の傾向であった。

また、すべてのグループにおいて責任意識と回避可能性意識が強く関わっており、Weiner（1995）の責任判定プロセスのモデルに沿う結果が示された。しかし、その関連の強さは日本語母語話者において顕著であった。

本研究ではCJ、JNS、CNSの非意図的出来事に対する事態認識しか報告していない。今後は事態認識と言語化の関係を調査する必要がある。中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の非意図的な出来事に対する事態認識は共通しているが、言語化も共通しているか、学習者と母語話者はそれぞれどのように言語化するか、事態認識と言語化は関わっているか、学習年数によって言語化の様子が変わるか、これらの問題を今後の課題として研究したい。

参考文献

伊藤秀明（2015）『日本語教育における対のある自動詞・他動詞の研究：文脈重視の文法教育論の構築に向けて』未公刊博士論文 筑波大学

奥津敬一郎（1967）「自動化・他動化および両極化転形－自・他動詞の対応」『国語学』70, 46-66.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

中石ゆうこ（2005）「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究－「つく・つける」,「きまる・きめる」,「かわる・かえる」の使用状況をもとに－」『日本語教育』124, 23-32.

西尾寅弥（1982）「自動詞と他動詞－対応するものとしないもの」『日本語教育』47, 57-68.

西光義弘（2010）「他動性は連続体か？」西光義弘・プラシャント・パルデシ（編）『自動詞・他動詞の対照』第8章, くろしお出版, 211-234.

廣瀬幸生（2011）「公的自己・私的自己の観点と主体性の度合い―言語使用の三層モデル―」『日本英文学会第83回大会proceedings』, 243-245.

望月八十吉（1991）「漢語語法札記」『北九州大学外国語学部紀要』73, 97-107.

守屋三千代（1994）「日本語の自動詞・他動詞の選択条件－習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』29, 151-165.

水谷修（1979）『話ことばと日本人―日本語の生態』創拓社

吉成祐子・プラシャント・パルデシ・鄭聖汝（2010）「非意図的な出来事における他動詞使用と責任意識－日本語・韓国語・マラーティー語の実態調査を通じて」岸本秀樹（編）『ことばの対照』くろしお出版, 175-189.

Berk-Seligson, S. (1983) Sources of variation in Spanish verb construction usage: The active, the dative, and the reflexive passive. *Journal of Pragmatics* 7, 145-168.

Hinds, J. (1986) *Situation vs. Person Focus.* Tokyo: Kurosio Publishers.

Pardeshi, P. (2002) "Responsible" Japanese vs. "Intentional" Indic: A Cognitive Contrast of Non-intentional Events.『世界の日本語教育』12, 123-144.

Weiner, B. (1995) *Judgments of responsibility*. New York: The Guilford Press.